

認定調査におけるポイント

米沢市高齢福祉課

1. 調査実施の際の注意事項

- ・調査を実施する際は、調査対象者のサービス計画を担当する介護支援専門員による調査は行わず、必ず担当外の介護支援専門員が調査を行なうようにしてください。
- ・調査は、緊急の場合を除き、調査対象者の生活環境や身体状況が変化した直後の時期を避け、安定した状態で行なうようにしてください。
- ・調査は、国から提示されている最新の「要介護認定 認定調査員テキスト（以下、テキストという。）」及び山形県又は米沢市主催の「認定調査員研修会」の研修で示された方法と留意点を遵守して適正に行なうようにしてください。

2. 認定調査におけるポイント

1-1 麻痺等の有無（テキスト P31～40）

- ・膝の拘縮がある場合、他動で動かせる最大の高さまで挙上でき、静止した状態で保持できれば、水平位置まで挙上できなくてもOKです。
- ・肩に関しても、軽度の可動域制限であれば、関節の動く範囲で確認しましょう。

1-1.2 麻痺等の有無・拘縮の有無（テキスト P31～40）

- ・下肢は、椅子に座った状態か仰臥位で確認をしましょう。座椅子で確認はしないでください。

1-3 寝返り（テキスト P41・42）

- ・肘等で加重して寝返りする場合は、「1.つかまらないうでできる」になります。あくまで何かに掴まるかどうかで判断しましょう。
- ・「1-4 起き上がり」では、体を支える目的で肘等でしっかり加重して起き上がる場合（加重しないと起き上がれない場合）は、「2.何かにつかまればできる」となるため、混同しないようにしましょう。

1-4 起き上がり（テキスト P43・44）

- ・体を支える目的ではなく、習慣的にベッド上に手や肘をつきながら起き上がる場合は、「1.つかまらないうでできる」となります。

1-7 歩行（テキスト P50～52）

- ・「2-2 移動」とは分けて判断しましょう。移動方法ではなく、**5m継続歩行**できるかどうかを判断する項目になります。
- ・「2.何かにつかまればできる」、「3.できない」を選ぶ際は**なぜできないのかを明確に記載**しましょう。
- ・調査時、歩行動作を確認できなかった場合や調査時にたまたまできた場合に、**日頃の移動の様子を踏まえて判断**してください。**頻回な状況で選択**します。

1-8 立ち上がり（テキスト P53・54）

- ・**床からの立ち上がりではありません**。椅子やベッド、車椅子等（**低めの椅子は対象外**）に座っている状態（膝がほぼ直角に屈曲している状態）から立ち上がる能力で判断します。
- ・常に床で生活している場合は、洋式トイレや通院時（待合室の椅子に座っている時など）の状況等で判断しましょう。

1-9 片足での立位（テキスト P55・56）

- ・調査時にできない場合でも、**普段の段差昇降や浴槽の出入り等**が行えているかどうかで判断しましょう。

1-12 視力（テキスト P63～66）

- ・視力確認表をしっかりと活用するようにしましょう。
- ・確認は、「名札等の文字→1 m先の視力確認表→目の前の視力確認表」の順番で行いましょう。
- ・反応がない場合は、「1 mの距離で目が合わせられる」「目の前のおかずが見えている」等、**日頃の様子で判断**しましょう。

1-13 聴力（テキスト P67・68）

- ・声の低めや高さではなく、あくまで**声や物音の大きさで判断**しましょう。

2-1 移乗（テキスト P70～72）

- ・**臀部の移動**であり、立位から座位という基準ではありません（**歩行→座る×**）。
- ・歩行移動できている方は、ほぼ「1.介助されていない」になると想定しております。
- ・腰を掛ける際に、筋力低下等で勢いよく座ってしまい、骨折したことがあるまたはその危険があると判断し、支えが必要であるという場合においては、一部介助に該当します。

2-2 移動（テキスト P73～75）

- ・自宅内における移動についてです。外出時の状況ではありません。外出時の様子は特記に記載しましょう。
- ・「ふらついて転倒の危険がある」という内容では、適切な介助の選択はできません。実際に転倒しているかどうかの状況で判断しましょう。

【例】

誤：独居のため、自力で移動しているが、ふらついて転倒の危険があるため、適切な介助の方法として見守りを選択

正：独居のため、自力で移動しているが、毎日のように転倒しており、非常に危険なため、適切な介助の方法として見守りを選択

2-3 えん下（テキスト P76・77）

- ・えん下が「できる」か「できない」かで判断しましょう。能力の項目です。
- ・ここでの「見守り等」は、「できる」「できない」いずれにも含まれない場合のことです。必ずしも見守りが行われている必要はなく、ただ見守りをしているから「見守り等」を選択するという解釈ではありません。
- ・「2-4 食事摂取（介助の方法）」と混同しているケースが見受けられます。

【例】頻回な咽込み・咳込みがあれば、「見守り等」となります。「咽込みがあり介護者がそばで見守りをしている」ことからの「見守り等」ではありません。

2-5.6 排尿・排便（テキスト P81～86）

- ・本人が何をできていて、何を介助されているのかを明確にし、頻度で選択しましょう。
- ・週1・2回のトイレ掃除や1日に何度もトイレに行くうちの一回の紙パンツ交換は、不適切でない限り、頻度的に該当しません。
- ・汚染したパッドの廃棄やその確認等の後始末は定義に含みません。
- ・排泄行為の選択肢「見守り等」の見守りとは、ただ立って見守っているだけの状態ではなく、常時付き添いの必要がある「見守り」「確認」「指示」「声かけ」等のことです。

【例】

誤：排泄行為は自力でできるが、ふらつきや転倒の危険があり終始見守りしているため、「見守り等」を選択。→×この場合は「1.介助されていない」を選択します。

2-7 口腔清潔（テキスト P87・88）

- ・歯磨きに介助を受けていても、うがいの状況で判断が変わります。

【例】

- ・介護者が歯を磨いてあげ、本人が口元までコップを運び、口をすすいで吐き出す行為がで

きる場合は「2.一部介助」になります。

- ・介護者が歯を磨いてあげ、介護者が口元までコップを運び、本人は口をすすいで吐き出す行為だけができる場合は「3.全介助」になります。

2-10.11 上衣の着脱・下衣の着脱（テキスト P93～98）

- ・「転倒しないように見守る」は衣服の着脱とは無関係です。

【例】

誤：着替え中に、転倒しないように見守っているため、「見守り等」を選択

正：認知症等で、衣服を上下逆に着てしまうため、確認・指示が必要であり、「見守り等」を選択

2-12 外出頻度（テキスト P99）

- ・頻度で選択するため、頻度を明確に記載しましょう。また、誰とどういう用事で外出するのかも記載しましょう。

3-2 毎日の日課を理解（テキスト P103）

- ・正確な時間を答えられなくても、朝～夕の大まかな流れが分かっているだけで OK です。

3-3 生年月日や年齢を言う（テキスト P104）

- ・回答した生年月日や年齢をそのまま特記事項に記載しないようにしてください。
- ・「生年月日正答する」、「何歳の差、何日のズレがある」等と記載しましょう。

【例】

誤：昭和〇年〇月〇日と回答したため、「できる」を選択

正：生年月日を正答したため、「できる」を選択

正：回答した年齢と実際の年齢は一歳の差があったが、「できる」を選択

※審査会では、個人情報が伏せられておりますので、生年月日が正しいかどうかの判断はできません。

3-4 短期記憶（テキスト P105・106）

- ・三品確認について誤った方法で行っている方が多く見受けられます。再度、正しい三品確認のやり方をテキストにて確認しましょう。
- ・三品確認のみに限らず、日頃の様子も聞き取り、より頻回な状況で判断するようにしましょう。

3-5 自分の名前を言う（テキスト P107）

- ・「失語症等で、呼名に反応した」というケースでは、声に反応しているだけということも想定できますので、本人と別の名前でも呼んでみて確認しましょう。

3-6 今の季節を理解する（テキスト P108）

- ・調査時の回答のみで判断するのではなく、**日頃理解しているのかも聞き取る**ようにしましょう。

3-9 外出すると戻れない（テキスト P112・113）

- ・「2-2 移動」において、一部介助や全介助を選択している場合、移動に付き添いを必要としているため、戻れなくなることはない想定されます（勝手に出てきたりする等を除く）。調査票全体を通しての整合性も大切ですので、注意するようにしましょう。

5-1 薬の内服（テキスト P132～134）

- ・服薬後、空袋を見て飲んだか確認するのは介助に該当しません。
- ・電話等で「飲んでね」、「飲んだ？」の確認や声掛けも該当しません。

5-3 日常の意思決定（テキスト P137・138）

- ・非日常的なことを誰かに相談したり支援を受けていたりしても、最終的に自分で決定していれば、「2.特別な場合を除いてできる」ではなく、「1.できる」となります。最終的に決定するのは、誰かで判断しましょう。

5-5 買い物（テキスト P141～143）

- ・**食材・消耗品等日用品の買い物**です。自分の欲しい物が自分で買えても定義と異なります。
- ・施設入所の場合、三食食事提供を受けていれば、食材から判断し、ほとんどの場合「4.全介助」になると想定します。

5-5.6 買い物・簡単な調理（テキスト P141～145）

- ・「一部介助」は、一部分の介助という意味ではありません。

【例】

誤：週5回は家族が炊飯しており、週2回は本人が行っているため、「3.一部介助」を選択。

→週全体のうち、週2回（一部分）を自分でしているから、一部介助という解釈ではなく、この場合、家族による全介助の炊飯の方が頻度的に多いため、「4.全介助」を選択します。

正：炊飯は一日1回本人が行っている。後の2回の食事で、ご飯や総菜の温めを家族が行っている場合は、家族が行う頻度の方が多いため「全介助」を選択。

6 群 過去 1 4 日間にうけた特別な医療について（テキスト P146・147）

- ・当該医療を必要とする理由・実施頻度・実施者・継続かどうかを明記するようにしましょう。なお、家族による処置対応は該当しません。

※施設入所者の場合、実施者の記載が抜けているケースが見受けられます。必ず記載するようにしてください。

7-1 障害高齢者の日常生活自立度『寝たきり度』（テキスト P155・156）

- ・判定に際しては「～をすることができる」といった「能力」の評価ではなく「状態」、特に「移動」に関わる状態像に着目して評価するものです。

【例】

- ・車椅子に移乗している
→「ランク B」：ベッド上で介助を受けているが、介助で車椅子に移乗できる状態。
 - ・寝たきり
→「ランク C」：ベッドの上で常時臥床し、日常生活全般に介助が必要な状態。
- ・「C 2」の定義の中に、「自力では寝返りもうてない」とありますが、寝返りにこだわらず、車椅子に移乗し、座位保持ができ、食事摂取等が可能な場合には、「C 2」の状態像には当てはまりません。
- ・常時、車椅子で生活されている場合には「ランク B」になると想定しております。

7-2 認知症高齢者の日常生活自立度（テキスト P157）

- ・あくまで、**認知症に関する判断基準**となります。
- ・日常生活に介助を要する場合であっても、認知症がない場合は、ランクは低くなります。
- ・例えば、7-1 が「C 2」であっても、認知症が全くなければ、7-2 は「自立」ということになります。

3. その他

- ・寝たきり等で、日常生活動作がすべて全介助のような場合、「全介助」のみの記載では状況がわからないため、どのような介護が行われているのか、手間はどうか等を記載するようにしましょう。
- ・対象者番号（被保険者番号）欄に、調査員番号を記載しているケースが多く見受けられますので、対象者番号を記載してください。
- ・概況や特記事項では、**固有名詞は使用しないでください**。「市内、県外、市内病院、高齢者向け施設」のように、個人を特定できない記載をお願いします。

- ・概況の枠からはみ出ないようにしてください。万が一、はみ出た場合、新たに調査票を用意することもできますので、ご連絡ください。
- ・調査票の調査員番号右側に調査実施者の押印または署名をしてください。
- ・調査票右下（施設連絡先欄の右下）に認定調査責任者または調査担当者以外のケアマネジャーが、誤りがないか調査票全体を点検した上で、押印または署名してください。
- ・特記事項の様式において、最新の様式を使用してくださいようお願いします。
※特記事項の様式右下に（V3.0）と記載ある様式が最新の様式です。様式は米沢市 HP に載せています。
- ・調査票の提出期限を過ぎる場合は、必ず市担当までご連絡くださいようお願いします。
- ・調査に関して、質問がある場合や判断に迷う場合（特に 4 群）は、高齢福祉課までお問合せください。

4.認定調査員向け e-ラーニングシステムについて(参考 1・2)

1.「厚生労働省 認定調査員向け e-ラーニングシステム」とは

- ・インターネット上で提供される認定調査員のための学習支援システムです。
- ・「認定調査員向け講座」では、全国の調査員が同じ問題を解くことで自身の理解度を把握する「全国テスト」と、動画を用いた「学習教材」、基本的な考え方や各調査項目の定義について学習する「問題集」が収録されています。
- ・調査員一人ひとりが自分の理解度に合わせて学習を進めることで、認定調査に関する知識を深めることができます。

2.受講に関して

- ・調査を適正に実施するため、「厚生労働省 認定調査員向け e-ラーニングシステム」の定期受講をお願いします。(厚生労働省 要介護認定適正化事業 <http://www.nintei.net/>)
- ・e-ラーニングシステムを受講するためには、ID とパスワードが必要となります。ID とパスワードは、市が発行いたしますので必要な場合にはご連絡ください。
- ・令和 6 年 3 月 11 日付けのメールでお知らせしたとおり、「全国テスト 14」「令和 5 年度重点問題集」が受講開始になりましたので、積極的に受講していただきますようお願いいたします。

5.要介護(要支援)認定を申請する際の注意事項

- ・代行で申請する際には、申請書表面の提出代行者名称欄を必ず記載してください。その際、上段の申請者氏名の記載が見受けられない場合多くありますが、担当者の氏名を必ず

記載してください。問い合わせをする際に担当者が分からず苦慮しています。

- ・介護新規申請及び区分変更申請の場合には、申請書の裏面に「前回申請した時に比べて変化があった点」等、申請理由を必ず記載するようにしてください。
- ・被保険者が入院中の場合は、必ず入院先の相談室等に本人の状態を確認・相談した上で申請を行なうようにしてください。本人の状態が安定しないまま申請をされても、主治医意見書の作成や認定調査を行なうことができずに審査が進みません。2～3か月以上の長期間の入院が見込まれるにも関わらず、入院日当日に申請されるケースも見受けられます。